



「表現の自由」と「法規制」
7月13日の読売の英字新聞 The Japan News の一面に Suspect learned how to make gun の見出しがありました。今ではネットを開けば何でも出ていて大変便利な反面、誹謗中傷やフェイクニュース、如何わしいサイトが溢

れ野放し状態です。6/24 読売朝刊解説面に、この問題で検討を重ねた日本の総務省が近く報告書を取りまとめるとありました。今世界では DSA(Digital Services Act)と DMA(Digital Markets Act) という 2 つの法規制があり、DMA が P F (プラットフォーム)

ム)と P F 利用企業の公正な競争環境の整備を目的としているのに対して DSA はユーザー保護を目的として情報流通に関する P F の責任を規定しているものだそうです。SNS は表現の自由を保障するものとして浸透しましたが大きなリスクも抱えています。

ドラゴンへの階段 第39回 (連載エッセイ版)

「消える」との「ない音」 佐藤 洋祐

暑い！という日が6月下旬から続きました。熱中症はいけません。子供のころのようにいつも走り回っている歳ではなくなった今、汗を自然にかけるといいうのは体に良いものだなと感じます。灼熱の太陽から降り注ぐエネルギーに体が喜んでいきます。花、木々、虫、鳥、あらゆる生き物がその恩恵を全身で享受しているようです。

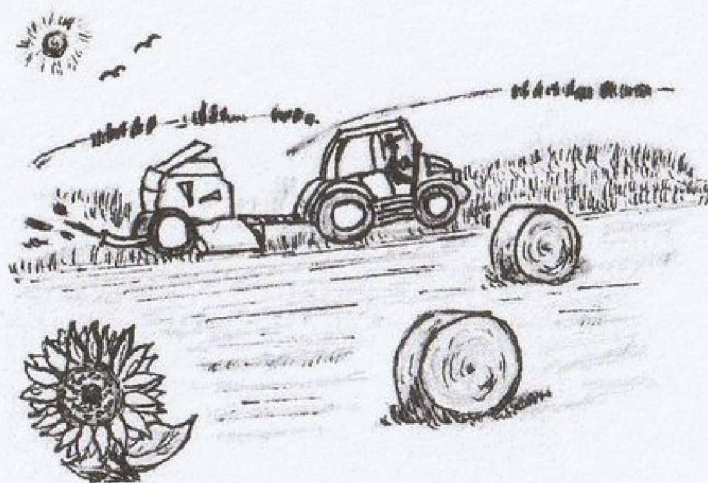
今日、我が家の小さな菜園の土から育ったトマトを食べました。先ほどまで枝になっていた実をもいでいただいたその味は、まさに「いのち」の味。乾いた喉に沁み込んでいく果汁から思いはめぐり始め、数限りない生命の循環の舞台としてそこに生きてきた「いのち」たちを蓄えてきた、我が家の小さな庭土の悠久の歴史に至りました。かつてそこに生きたものは今はこの世に居なくとも、こうして土壌の栄養となつてまた新たな生き物を育む。そこまで考えると、生と死という概念は確かに状態の変化を表現してはいるけれども、結局のところは生き物、生命が途絶えることはない、つまりこの世にはいつでも「生」だけが永遠に続いているんだよ、と、真っ赤に熟れたトマトが私に語りかけてきます。

私を純粋に応援してくださる方が「音」というものは残らずに消え去ってしまうものだから、何か後世に形あるものをお残しになることをお考えなさい、例えば、あなたの尊敬する先人たちが残された名曲のような・・・とおっしゃいます。何と優しく嬉しい、混じりけのないピアノな声援でしょう！その一方で、私の出した音というのは、本当に残らずに消えてしまうものなのだろうか、と再び思いはめぐります。水面に小石を落として生まれた波紋は、目に見えなくなつた時点で私たちはそれが「消えた」と言いますが、果たしてそうでしょうか。波はどこか他で生じた波と相関しながら、その姿が見えなくなつても消えることなく永遠に残り続けはしないでしょうか？水面に生まれる波紋と同様に波の運動である音は、私たちの聴覚では感じ取れなくなつたとしても、なんらかの形でこの宇宙のどこかに残り続けてきたのではないだろうか、そんな気がしてならないのです。そして、もしそうだとしたら、こうして音を出し続けている私の責任ってなんて大きいこと！

先日、和歌山県の高野山にお参りした折に、滞在させていただいた宿坊のお寺の住職さんが、「人が生きる以上は、身口意の三蜜(しんくいのさんみつ)。行ったこと、口にしたこと、思ったこと)によって計らずも罪を追うものです。それを清めるために、手に塗香(すこう)という粉を手塗りに、その手を顔の前で三度交差させて香りを嗅ぐのです」とお教えくださいました。それ以来、我が家の玄関には塗香が置いてあり、出かけるときにはそれを手に塗って香りを嗅ぎ、同時に私たちの生きる上での責任を確かめます。演奏した音、口に出した言葉、心に浮かぶ思い。それらが残り続けるとしたら、いつでも優しいあなたかき音、言葉、思いだけを生み出したい。それが正しい、立派である、見目麗しい、耳ざわりが良いということ以上に、いのちの循環の中に良く調和した存在としての音を生み出したい、という思いに至ります。そう、あの口の中に甘酸っぱく広がった、虚飾のない素朴なトマトの味わいのような。

(2022年 7月10日筆)

佐藤 洋祐(サトウ ヨウスケ)
ジャズミュージシャン。サクソフ奏者としてグラミー賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。



挿絵 TAKAKO